

2017年5月28日(日) 礎キリスト教会 礼拝説教要約

聖書箇所 詩篇30篇1節～12節

「涙を喜びに、嘆きを踊りに変える主」

ある大学の実験室での出来事…涙の話。人が流す涙には色々な意味があります。喜びや感動の涙もありますが、悲しみや苦しみの涙、或いは悔し涙です。けれども、聖書はその先を私たちに教えています。それは涙で終わらず、その先には主にある希望があるということです。試練はやがて終わり、喜びに変えられる日が来るということです。ですから、聖書が教える一日は、朝から夕ではなく、夕から朝であると記しています。

詩篇30篇はダビデが書いたものです。この時、ダビデは死を覚悟しなければならない状況にあったようです。しかし、神はダビデを回復させて下さいました。その時に、この詩を書いたのではないかとされています。人生には順調な時もあれば、逆境の時もある訳です。そのような時に必要な備えとは何か。

ダビデは人生が順調に進んでいる時には、自信に溢れていました。「私は決してゆるがされない」と自負していたのです。ところが、大きな病気が彼を襲いました。「あなたが御顔を隠され、私はおじ惑っていました」とあります。ダビデは自己過信に陥っていましたが、逆境の中で、あらためて神の助けが必要であることを自覚し、神に祈り、叫ぶ者へと変えられていったのです。私たちの人生においても、あえて逆境の時を主から与えられることもあります。その時、大切なメッセージを受け取ることができる。詩篇30篇は、私たちに教えています。

私たちが誰に向かって叫ぶかは大切です。ダビデは天地万物を造られた主なる神に向かって叫んだのです。ここに信仰者として生き方が記されています。その私たちに對する、神の約束は「まことに御怒りはつかの間、いのちは恩寵のうちにある」人生に夕暮れの時、暗闇が迫るその時、涙にさえぎられて、嘆き悲しむ時、忘れてはならないのは「いのちは恩寵にある」ということ、つまりは「まことの命を得させるため」に、主にある苦しみ、試練の時があるということです。

夕暮れには涙が宿るようなことがあっても、朝明けには喜びの叫びがある。何故なら、まことの光であるキリストが、私たちの所に来て下さったからです。この光の中を歩むクリスチャンは、この地上の歩みを終えても、神の御国の中に導かれ光のうちに歩み続けるのです。神様は、私たちの嘆きを踊りに変えるために、この約束を与えて下さいました。私たちの涙を、悔し涙から、後悔する涙から、主に愛され、許される喜びの涙に変えて下さるのです。